

クロサンショウウオの保全活動について

1. クロサンショウウオとは

成体は森林の林床に生息し、幼生は山間の湿原や池沼などで生育する日本固有種の両生類で、東北、北関東、北陸、佐渡など東日本を中心に分布しています。岐阜県内では主に飛騨地方の東部と西部の山地に分布しており、本種の南限～西限に近く、高山市、飛騨市などで確認されています。その岐阜県内の大部分の生息地では、生息条件が明らかに悪化して個体数が大幅に減少しており、環境省のレッドデータブックでは準絶滅危惧に、岐阜県のレッドデータブックでは絶滅危惧 II 類に指定されています。

繁殖期は4月中旬から7月にかけて雪解けの頃で、標高の高い場所ほど遅い傾向があり、山間の湿地や池沼などで産卵します。卵のうは白または半透明のアケビ型で、幼生はバランサーを持ち尾に黒斑があり、幼生の間は止水性の池沼などで生育し、多くは夏頃までに変態し山へ移動して生育します。成体は全長約15cm、暗褐色または黒褐色でしばしば黄褐色の斑紋があり、尾は長く全長の半分近くになります。



産卵(4月)
アケビ形の卵のうの中に
卵は約40個含まれている



卵からふ化(5月)
見た目はオタマジャクシ



上陸できるまでに成長(8月以降)



バランサー(えら)が生えてくる(6月)
3cm程度の大きさに成長



写真4 クロサンショウウオの生活史

2. ビオトープの整備(環境保全活動)

E41 東海北陸道が通過する白川郷では、繁殖場となる湿地や沼地が乾燥化により消失の危機に瀕し、クロサンショウウオの生息数が年々減少していました。当社では「白川郷周辺に生息する天然のクロサンショウウオをはじめとする両生類や昆虫など、多様な生物が生息できる里山に近い環境とする」ことを目標に、2014年にビオトープを整備しました。これまで、有識者にもご意見をいただきながら、5年後、10年後の保全目標を立て、段階に合わせて整備・保全活動に取り組んできました。

ビオトープを整備した場所はトンネル建設時に発生した土を盛土した場所で、肥沃な土ではなく周りに日陰となるような大きな樹木もない生息に適さない環境でした。これまで何度か植樹し、夏には寒冷紗をかけ、池の水量を調整するなど、よりクロサンショウウオの生息に適した環境となるよう、周辺の環境整備に取り組んできました。



写真5 ビオトープ造成当初(2014年)



写真6 ビオトープの様子(2019年)

ビオトープの整備目標と主な活動内容

ステップ	整備目標	主な活動内容
2014～ 第一段階 (1年目)	ビオトープを中心とした約200㎡の領域で、クロサンショウウオなどが生息できる最低限の環境整備	クロサンショウウオが卵からふ化して陸に上がるまでの間、生育できる池周辺の環境を整備
2015～ 第二段階 (2～5年目)	ビオトープを中心とした約2,000㎡の領域で生物が生息・繁殖できる環境整備	クロサンショウウオが陸に上がり、成体として生育でき、また産卵に戻って来られる環境(池周辺とその周りの樹林)を整備
2020～ 第三段階 (6年目～)	天然のクロサンショウウオが、ビオトープで生息できる環境整備	クロサンショウウオのビオトープが周辺の生態系の一部となり機能している状態を維持管理

2017年からは地域と連携・協働した取り組みをおこなっています。2018年度、2019年度は、白川村立白川郷学園の5年生の理科の授業の一環として、産卵池で採取した卵のうを夏まで飼育観察していただきました。

さらに、2019年9月には同学園の6年生が育てたどんぐりの苗木(現6年生が4年生のときに将来の植樹を目的として拾ったどんぐりから育てた苗木)をビオトープの周辺に植樹するイベントを実施しました。

これらの学園生との協働活動は、地域の自然について知っていただく環境教育にもつながると考えています。